

# 英語教育の授業

## 1. コア・カリキュラムを意識した教育の到達目標

文部科学省より平成15年3月に「英語が使える日本人」育成のための行動計画が発表された。中等教育から高等教育までの一貫した指針であり、19年度までの5カ年間に国が取り組むべき施策を取り纏めたものである。大学ではこの指針を受けて、「仕事で英語が使える人材の育成」が求められている。専門知識を活用する中で表現手段としての能力、コミュニケーション能力、いわゆる社会での実践的な運用能力の育成が教育目標である。具体的な能力の到達目標は、以下の通りである。

### 読む力

新聞等を素早く読んで要点を理解する。多様な読み物の要点を理解する。専門書や契約書等の内容を理解する。

### 聴く力

英語のニュースを聞き取り要点を理解する。映画やドラマを鑑賞し、要点を理解する。専門分野の口頭発表や授業などの要点を理解する。

### 書く力と話す力

日常生活で意思疎通ができる。意見・考えを伝達し、質問や議論ができる。文章として考えを伝達できる。

### 4 技能を活用して問題を解決する能力

英語を活用して情報の検索・収集・分析を行い、問題解決に役立てることができる。

### 異文化社会でコミュニケーションする能力

自文化を伝達し、他文化を理解することができる。

## 2. 教育現場の課題

### (1) 英語教育の目的及びカリキュラムの見直し

英語教育は、技能教育であり、教養教育であることから、英語技能の習得と英語を媒体として学ぶことが分離され、どちらか一方だけの教育に偏ってはならない。英語教育の目的とカリキュラムを見直すべきであろう。

### (2) 英語教員の教育力向上

日本人の英語教員に基礎および専門知識と教育的資質に温度差がある。また、教育方法においても教育技術やIT活用技術の格差がある。大学としてファカルティ・デベロップメントを行うとともに、教員の教育評価を実践すべきである。ネイティブにはない教育力の判断基準を文部科学省の下で整理し、教員各自に自己点検・評価を徹底し、資質向上を促すことが必要である。

### (3) 多様化する英語の基礎能力と学習力

英語の基礎能力、学習意欲が多様化している中で、学生一人々の習熟度に合わせた技能教育の向上と教室全体での学習意欲の向上を目指した英語教育の改善が必要である。

### (4) 英語能力習得度の保証

単位修得をもって英語の実際の運用能力の保証とはならない。統一的な検定制度が導入されているわけではないので、到達目標を明確にし、社会に提示して不断の評価を受けることが必要とされる。

### 3. 教育改善のための授業設計・開発・運営の方向性

大学での英語教育は、4技能や文法、語彙などの基礎を繰り返すのではなく、実社会を見据えた明確な学習理論を構築し、理論と実践の乖離を防ぎながら授業を科学し、授業設計する教員の教育力と学生が自律的に学習を実践する学習力によって可能となる。それには、大学として到達目標の全てに亘る教育プログラムを提供することが望まれる。以下に到達目標で掲げた授業内容・設計の視点を掲げる。

#### (1) 授業内容・設計の視点

##### 英語を読む・理解する能力を育成する授業

日常生活や実社会で英文を読んで理解するために、以下のような授業が必要である。

- \* 速読力の養成では、英字新聞、インターネット上の時事記事を教材として、分単位で語数を測定するとともに、記事の内容について目的、概要について説明させ、理解度を評価する。
- \* 多読力の養成では、語彙と文法を段階的に分類した大量のGraded Readersを設備して、楽しみながら読破させ、あらすじと読後感を説明させ、説明力を評価する。
- \* 精読力の養成では、専門分野の知識と専門用語の事前理解を前提に、専門書を熟読して要約させ、評価する。

##### 英語を聞く・理解する能力を育成する授業

日常生活や実社会で英語の音声を聴いて理解するために、以下のような授業が必要である。

- \* 視聴力の養成では、実際の英語版ラジオやテレビ番組などを加工して教材を作り、番組の目的・概要の要点を説明させ、理解力を評価する。
- \* 鑑賞力の養成では、英語版の映画・ドラマを鑑賞し、あらすじと感想を説明させ、評価する。
- \* 聞取力の養成では、専門分野の知識と専門用語の事前理解を前提に、専門分野の口頭発表や授業などを聞かせて要約させ、評価する。

##### 英語を話す・相互作用を行う能力を育成する授業

日常生活や実社会で自らの意見・考えを口頭で発信し、相手と交渉などの行動ができるようになるために、以下のような授業が必要である。なお、評価には、ネイティブ、社会の実務者を交えて行うことが肝要である。

- \* 会話力の養成では、ネイティブを相手に日常生活に必要な表現力と会話運用力を演習し、対話による能力を評価する。
- \* 交渉力の養成では、ディスカッション、ディベートなど交渉のためのさまざまな事前演習を行い、二人もしくは多人数と意見の違いや問題解決を演習する。その上で口頭で交渉する能力を評価する。
- \* 発表力の養成では、考え、思想をあらかじめ文書としてまとめさせ、多人数の前で発表させて的確に答えさせる能力を評価する。

##### 英語を書く・相互作用を行う能力を育成する授業

日常生活や実社会で自らの意見・考えを文書で発信し、相手と交渉などの行動ができるようになるために、以下のような授業が必要である。なお、評価には、ネイティブ、社会の実務者を交えて行うことが肝要である。

- \* 文通力の養成では、ネイティブを相手に日常生活に必要な英文表現力と文通技術を演習し、文通による表現力をコミュニケーション力を評価する。

- \* 交渉力の養成では、取引、商談など交渉のためのさまざまな事前演習を行い、二人もしくは多人数と意見の違いや問題解決を演習する。その上で英文で交渉する能力を評価する。
- \* 発表力の養成では、考え、思想を文書としてまとめさせ、多人数の前で発表させて的確に答えさせる英文作成と返事する能力を評価する。

#### **テクノロジーを活用して問題解決する能力を育成する授業**

4 技能と情報機器、情報通信技術を活用した問題解決ができるようにするために、以下のような授業が必要である。

- \* 情報検索力の養成では、ネットワーク上の英語資源から必要な文字、音声、画像を検索させる演習を行い、活用力を評価する。
- \* 情報収集力の養成では、ネットワーク上の英語資源から必要な文字、音声、画像を整理・ファイリングさせる演習を行い、収集・整理力を評価する。
- \* 情報発信力の養成では、電子掲示板、電子メール、ブログを活用した演習を行い、発信力と問題解決力を評価する。

#### **異文化コミュニケーション能力を育成する授業**

相手の文化を理解し、英語を通じてコミュニケーションを円滑に行うことができるようにするために、以下のような授業が必要である。

- \* 自文化理解力の養成では、自文化を理解した上で、異文化社会で自文化を的確に説明する演習を行い、自文化への理解力を評価する。
- \* 他文化理解力の養成では、他文化を調査・整理した上で、他文化と自文化の同一性・異質性を理解する演習を行い、他文化への理解力を評価する。
- \* メタ言語能力の養成では、言語と文化の観点から日本語と英語の言語構造、語彙と表現などを比較し、英語の理解と活用を演習し、評価する。

## (2) 授業開発の方向性

上記の授業内容・設計を実現するには、教員個人の努力では不可能である。大学として求められる実践的英語運用能力の育成という英語力の目標を明確にし、全学の関係教員の意見をもとにコア・カリキュラムを策定し、水準別の教育プログラムを設定する必要がある。

その上で授業に必要な教材を開発することになるが、授業内容の易しいレベルから高度なレベルまで教材を準備することは一大学では困難である。それには大学が連携する中でレベルに応じた授業が受講できるよう、大学連携による単位互換など相互利用の仕組みの構築が望まれる。

参加する大学は、授業の目標・水準レベル、運営方法、教材、成績評価の方法をセットとした、授業モジュール化のデータベースを構築し、ネットワークを介して他大学に提供できるようなコンソーシアムを形成する。

コンテンツには、分野、目的、授業時間、小テストの利用法、設備・ソフト、著作権者、利用条件の有無などのメタデータを掲載し、共同利用に必要な情報の標準化を図る。

学生の能力に応じた学習環境を整備するため、学内で共通プログラムを設定し、全ての学生が自己診断可能なシミュレータで学習水準を設定し、Webからモジュール化した授業にアクセスし、eラーニングが可能なプラットフォームを構築する。なお、英語を担当する教員は、常に学生の学習状況を把握し、学習が断絶しないよう個人指導することが重要である。

## 4. ITを活用した授業モデルの紹介

### CD-ROM活用によるTOEICスコア向上を目指した授業

#### 1. 授業のねらい

この授業は、英語に苦手意識をもった初級レベルの学生を比較的短い学習時間で大幅なTOEICスコアの向上をはかることを目的としている。CD-ROM教材を活用し独自に工夫した授業設計と学習支援を行った。

#### 2. 授業のシナリオ

適切に選択した教材の学習効果を最大限引き出すためには、学生に指針を与え、目的意識を高め、自己学習の時間を増やすように方向付ける「しかけ」が不可欠である。ここでは、このような動機付けや評価を工夫した3学期間の授業のうち、1年次後期の授業設計と運営の実際について紹介する。1年次後期には、下表に示した授業の流れに沿って、個別学習に一斉指導を織り交ぜた90分授業を行った。

授業の流れ	時間	指導内容	学習形態
導入と復習	20分	単語ペーパーテスト（自己採点+回収して教師が再採点）	一斉
		リスニング Type A / Bテスト（自動採点）	個別
学習作業	30分	リスニング教材の学習	個別
	10分	単語ペーパーテストの返却, 休憩	一斉
	25分	語彙教材の学習	個別
定着の確認	5分	語彙定着確認ドリル（自動採点）	個別

#### 3. IT活用の詳細

##### (1) 教材

###### 語彙教材

3種類の語彙力養成用教材「TOEIC語彙1、2、3」(入門・初級・中級)を独自開発した。各教材は10~12ユニット構成で、半期に200語から240語とその用例400種から480種が学習できる。

###### リスニング教材

EGP用の教材として「First Listening」を選定した。「3ラウンド・システム」と呼ばれる明確な指導理論に基づいて開発されている。6ユニットからなり、2週間に1ユニットのペースで進むと半期で完了する。学習履歴はフロッピーディスクに保存され、各ユニットの最後には自己診断テストが付いている。また、この教材に対応した補助教材として、比較的難易度の低いテスト教材2種類を独自開発して指導実践に組み入れ、それを動機付けに活用している。

###### 文法教材

初級学生向けに「TOEIC Grammar」を開発した。TOEICリーディングセクションで頻繁に問われる「句構造」を重点的に扱う教材である。「名詞句」「動詞句」「語形変化」の3ユニットからなり、全体で約400問の練習問題が設定されている。

##### (2) 単語ペーパーテスト

授業は2種類の復習テストから始まる。まず、前週の学習語彙の定着確認のため、教員が口頭で単語テスト10問を出題し、ペアで答案を交換、採点の後、提出させる。

### (3) リスニングテスト

次に、前週のリスニング教材の内容についてCD-ROMテストを行った。学習意欲を高めるためにユニットごとに2種類の動機付け用評価テストを自作した。TypeAのテストは、比較的易しい課題を達成して成功体験を重ね「やればできる」という感覚を与えるためのテストである。該当ユニットを一度学習していれば、容易に正解できる内容の英問4択式問題であり、20問中18問以上の正解を合格点とした。自動採点で結果が即時に確認できる(図1)。もう1つのTypeBのテストは、リスニング教材の「Words & Phrases」に出現する単語とフレーズの音声を聞いて、聞こえた通りにタイプする基礎力向上をめざすためのテストで、TypeAと交互に隔週に実施した(図2)。正確に聞いて正確にタイプするという課題は4択形式に比べ難易度が高いため、合格点は20問中12問以上の正解とした。



図1

### (4) リスニング教材の学習

学習作業の前半はリスニング教材を使用した。学習の進捗状況は学習用フロッピーディスクに保存されるが、同時に紙に印刷した進捗表にも学習終了日を記入させ、毎授業時に教員が学生の進捗を点検した。半期で学生全員にすべての学習ユニットを終了させた。学生が個別学習している間、教員は単語テストの採点を見直した。

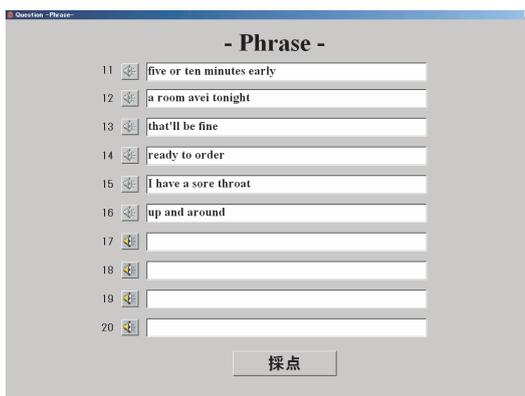


図2

### (5) 単語ペーパーテストの返却、休憩

授業中盤の10分間は学生への指示、答案返却、休憩、次の教材への移行準備をする。教員は学生一人々に励ましとともに単語テストを返却し、IT活用授業で不足しがちな教員と学生間のコミュニケーションの補充に努めた。

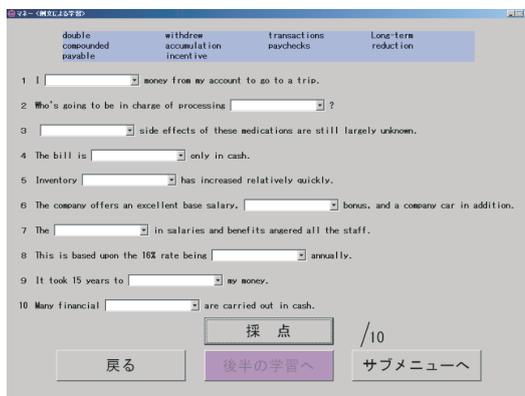


図3

### (6) 語彙教材の学習

授業の後半は自主開発のTOEIC向け語彙学習教材を使い、20語の12ユニット分、240語を指導する(図3)。

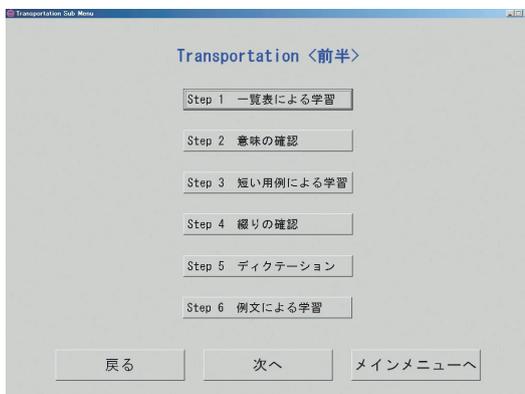


図4

### (7) 語彙定着確認ドリル

授業終了5分前に、一斉に語彙教材各ユニットの最後に付属するドリルを行い、その場で採点結果を確認する。授業後半も集中力を持続させるのにこのドリルは有効であった(図4)。

## 4. 授業効果

### TOEICスコアの上昇

1年次前期、後期、2年次前期の「コミュニケーション・・・」(必修)を3学期間通して履修した学生は25名であった。効果の測定にはTOEIC第2回公開問題を使用し、1年次前期の初回授業時にプリテスト、2年次前期の最終授業時にポストテストを実施した。両者の正答率を換算表によってTOEICスコアに換算し、その差を上昇量として観察した。TOEICトータルスコアは、314.8点から419.6点へ平均104.8点上昇した。授業ではリーディングを指導しなかったが、語彙量の拡大や句構造の概念の指導が文を理解する助けとなり、リーディングスコアの上昇に反映されたと考えられる。

	プリテスト(点)	ポストテスト(点)	得点上昇(点)
リスニングスコア	173.0	226.0	53.0
リーディングスコア	141.8	193.6	51.8
トータルスコア	314.8	419.6	104.8

### アンケートの結果

IT活用学習全般のアンケートでは、学習開始前は73%の学生が英語を苦手と感じていたが、学習後はパソコン学習が楽しかった(54%)、効果があることが実感できた(70%)、今後も学習を続けたい(69%)であった。また、動機付け教材(TypeA/Bテスト)については、55%の学生がテストを「面白い、楽しい」と答え、77%~84%は「このために勉強した」との回答があった。なお、自習時間は平均約3時間であった。

## 5. 問題点・課題

学生の学力低下のため、これまでに開発してきたIT活用教材のレベルが合わなくなり、新たにリメディアル教材を開発する必要があるが出てきている。このように、対象者の習熟度レベルが変化する今日、きめ細かくレベル別教材を準備するのは容易でなく、コンテンツの共有化が緊急の課題である。

## CALL教室を活用した英語導入授業

### 1. 授業のねらい

この授業では、大学生にふさわしい知的な対話を行うための英語運用力を身につけることを目標としている。

### 2. 授業のシナリオ

TOEICで300点以下から900点以上と多様な学生がクラスに混在している中で、1人の教員が6クラス前後担当する授業を前提として、日本人の教員が担当する授業の例を示す。1年前期では2週間を一つのサイクルとして、マルチカードを利用した質疑応答練習を導入とし、応答練習の内容を思い出しつつ400語を目標にパソコンに複数のパラグラフからなる文章にまとめ、6人程度の学生が採点して返却し、修正した文章を提出する。1年後期では、文章作成に先立って応答練習の内容を思い出しながらパワーポイントで6名のグループで相互に発表した後、文章作成の作業に入る

【宿題】	読書（graded reader 等を週一冊の割合で）	【個人】
【授業開始前】	座席配置表に基づいて着席・PCの起動	【個人】
【10分程度】	エクセルに多読記録を記入して提出	【個人】
【10分程度】	読解ドリル（プリントの英文を読み質問に回答）	【ペア・ワーク】
【20分程度】	マルチカードを使用した口頭での質疑応答練習	【3人一組】
【後期のみ・10分程度】	PowerPoint のoutline表示でスライド作成	【個人】
【後期のみ・10分程度】	PowerPoint を使用してミニ・プレゼンテーション	【6人で1グループ】
【20分程度】	[ 隔週で ] Word で400語を目標に文章作成	【個人】
【宿題】	[ 隔週で ] 授業中に書き始めた文章の完成	【個人】
【20分程度】	[ 隔週で ] 宿題で完成させた文章の相互チェック	【6人で1グループ】
【宿題】	[ 隔週で ] 相互チェックに基づく文章の再修正	【個人】
【前期20分程度・後期10分程度】	Word とメディア・プレーヤーでリスニング練習	【個人】
【宿題】	リスニング練習の続き	【個人】

### 3 . I T 活用の詳細

#### ( 1 ) 座席配置

個人作業、ペア・ワーク、3人編成のグループ、6人編成のグループなど、複数の学生の組み合わせで学習活動を進める。学生の組み合わせが毎回変わるように週替わりの座席配置表を用意し、学生に提示する。

#### ( 2 ) 多読

多読用図書として200冊ほどの本を教室に用意する。学生は自由に一冊選び、次の授業までに読んで返却する。授業開始時には、図書の返却と借り出し、エクセルの読書記録ファイルに情報の追記、ファイル名を更新、課題提出用フォルダに提出などの作業を行う。

#### ( 3 ) 質疑応答練習

文章作成のウォーミング・アップ、英語による知的な対話のため『足場かけ』として、3人編成のグループで応答練習を行う。質問は教員が用意し、3人の学生はそれぞれ回答を考える時間に10秒、回答時間に1分など、具体的な時間制限を指示する。質問に対して即座に例や理由をあげて回答すること、相手の顔を見て話をするを重視する。

#### ( 4 ) 文章作成

応答練習でのやりとりを思い出しながら、30分で400語を目標にWordで文章を作成する。大部分の学生は完成させることができないので、授業中の作業結果のファイルを学生用PCの作業用ドライブから課題提出用フォルダに提出するとともに、宿題のためUSBフラッシュメモリ等で持ち帰り、完成させた上でファイルとプリントアウト5部を次回の授業に持参する。次回の授業では、同じ話題についての応答練習を行った後、6人のグループで文章の相互チェックを行う。相互チェックは改行・句読点・段下げなどの形式面、文章の構成や論理的結束性、内容面の3点を中心に授業担当者の用意したチェックリストに沿って行い、最後に採点して返却する。

#### (5) ミニ・プレゼンテーション

後期には、文章作成に先立って、パワーポイントで2、3枚のスライドを作成し、6人のグループで交互に1、2分ずつ発表し、質疑応答を行う。このミニ・プレゼンテーションにおいても、聞き手の顔を見て話をすることを重視する。聞き手に対して必ず一つ以上の質問をするという課題を示し、他者の発言内容に着目する練習とする。パワーポイントで作成したファイルは上記と同様一定の形式でファイル名を付与して回収する。

### 4. 授業効果

#### コミュニケーション力の向上

言葉を交わしたことのなかったクラスメートと話をするきっかけとなり、クラス内に新しい友人ができたとする学生が毎年数多く存在する。

#### 英語スピーキング力の向上

口頭英語自動試験PhonePass SET-10のスコアの平均について、前期終了時と後期終了時を比較して測定標準誤差を若干超える程度の改善が見られた。質疑応答練習を行っていなかった前期終了時と後期終了時には同様のスコアの改善が見られないことから、練習の効果を示唆する可能性が考えられる。自分の主張について例や理由をあげて説明する習慣が少しずつ定着する傾向が観察される。

#### 英語による文章作成力の向上

4月の授業開始時点では30分で1行程度しか書けない学生が大部分であったが、前期終了時点では200語を超える学生が大部分となり、400語近く書ける学生も若干名現れた。後期終了時点では、多くの学生が400語程度の文章を作成できるようになった。文法・語彙については間違いや不適切な部分も多いが、つなぎの表現も含めてそれなりに英語の文章らしくなっている。2004年度後期にETSのエッセー自動評価採点システムCriterionを試用したところ、修正後の文章で4点を越える学生が大部分で、さらに少し工夫することで6点に達する学生も多かった。

#### 英語によるプレゼンテーション力の向上

パワーポイントを使用した経験もない学生が大部分であるが、授業を3、4回進めると10分程度の短時間で考えを整理して2、3枚のスライドを用意して英語での発表を始められるようになった。

### 5. 問題点・課題

#### クラスの適正規模

この授業は、1クラス30人程度を前提に開発したものであるため、10人を下回るクラスでは逆に盛り上がり欠け、学生が自分たちの応答や発表に意識が集中しすぎて緊張し、20人を超えるクラスで得られるほどの効果が上がらない傾向が見られる。

#### 流暢さと正確さの両立

ことば数の多さを重視し、表現の的確さは学生の自主的な学習に依存する部分が多い。eラーニングを活用した語彙学習なども並行させる必要がある。また、より少人数の指導において正しさを高める工夫も必須である。

## 電子掲示板を活用した大学間交流授業

### 1. 授業のねらい

この異文化コミュニケーション授業は、異文化社会に関する諸問題をテーマに、国内の外国人留学生との異文化交流、国際交流を通じて、英語と日本語によるコミュニケーションの方法を演習することを目指している。

### 2. 授業のシナリオ

パソコンの基本操作を修得した理工学部2、3年生を対象、選択科目、半期1単位(90分15週)で、多様な英語レベルの学生を対象としている。クラスサイズは平均60名前後で1人1台のパソコンが可能なCALL教室を使用している。15週の年間授業日程は以下の通りである。

第01週～03週	オリエンテーション。電子掲示板の利用と交流方法及び英文作成の基本。
第04週～07週	異文化理解：課題と演習1, 2, 3, 4及び留学生との掲示板交流
第08週～10週	言語コミュニケーション：課題と演習1, 2, 3及び留学生との掲示板交流
第11週～13週	非言語コミュニケーション：課題と演習1, 2, 3及び留学生との掲示板交流
第14週～15週	まとめ

15週の授業全てに亘り、以下の授業のシナリオに沿って90分の中で講義(座学習)、演習(個別学習)、交流(グループ学習)を適切に配分して、学習活動にメリハリをつけている。その上で、それぞれの授業区分の下位目標を設定している。

区分	授業内容と目的	学習活動
講義 (30分)	<異文化理解と言語・文化・コミュニケーションに関する講義>	座学
	異文化理解に対応する文化理解とコミュニケーションに関する知識を学ぶ。	
	異なる言語文化に対応するための言語と文化に関するメタ言語能力を養う。	
演習 (30分)	<課題に関する演習・小論文作成。掲示板に課題提出>	個別学習
	インターネット上の膨大な知的資源を検索して課題解決の情報を収集する。	
	ワードと辞書エンジンを使って、日本語・英語の語彙や表現の違いを学ぶ。 自分の意見を日本語で記述して、最後に英語の論理的な小論文にまとめる。	
交流 (30分)	<小グループ単位による掲示板での意見交流と投稿>	グループ学習
	WEB上の交流を通じて衣食住等、身近で文化的に根深い問題を理解する。	
	異文化背景を持つ学習者同士の交流を通じて、同一性と異質性を理解する。 課題ごとの授業連携と関心ある内容のグループワークで自律的に学習する。	

### 3. IT活用の詳細

#### (1) 授業の準備

授業は、外国人留学生の日本語授業と日本人学生の英語の授業間交流のため、他大学と授業の目的・内容・交流方法などを事前に調整する。同時に、学生同士の協調学習を可能にする場として掲示板を設定する。教材は双方共有する部分もあるので、全て自作によるデジタル教材である。交流の課題は、他大学がそれぞれ異なる授業内容となるため、交流のグループ学習では本学のクラスをグループに参加大学の3大学に分割編成する。

## (2) デジタル教科書とネットワーク環境

他大学との教材の共有・保管、臨機応変な修正・加工、教材の配布・回収などが可能となるように、全ての教材をデジタルファイルで作成する。また、学生がいつでもどこからでも入手や投稿可能なネットワーク環境を設定する。

## (3) 日本語・英語による課題の作成

教室では1人1台のパソコンとネットへのアクセスが可能で、文書作成機能と日英辞書エンジン・日英比較コーパス・翻訳ソフト、さらに動画作成機能を整備して活用する。

## (4) 投稿と発信

交流による投稿は、携帯電話でも投稿可能なWeb上の電子掲示板、eメール、CGIアンケート、チャットを活用する。

## (5) 教員間の交流

学生中心のtask-basedな授業設計のため、教員はMLや会合により教員間での授業スケジュール・運営及び共通課題を設定する。また、学生間の協働学習としての掲示板運営とグループへの介入、オフィスアワー（教師 - 学生間交流）コーナーへの書き込みも頻繁に行う。

# 4. 授業効果

## (1) 言語学習の観点 (図1)

英作文が質的に向上した。簡潔で論理的な分かりやすい英語で表現する英文の作成が観察された。

英作文の量が増えた。お互いが同年代で第二言語の学生であることから、間違いを恐れず、議論や論点を十分理解するために積極的に英作文を作成することが観察された。

メタ言語能力が向上した。日本人学生は日本語・英語を投稿する立場から、稚拙な日本語と翻訳英文を何度も推敲するようになった。

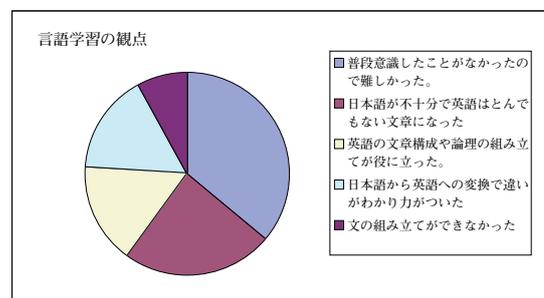


図1 言語学習に関するデータ

## (2) 異文化理解の観点 (図2)

異文化交流が英語学習の動機付を高めた。

自己表現の方法を再考・工夫し、交流時の言語表現も相手の意向を伺うなど、異文化接触による態度と行動が向上した。

多様な意見に対する寛容と思いやりなど、自文化にはない主体的な異文化理解の様相が観察された。

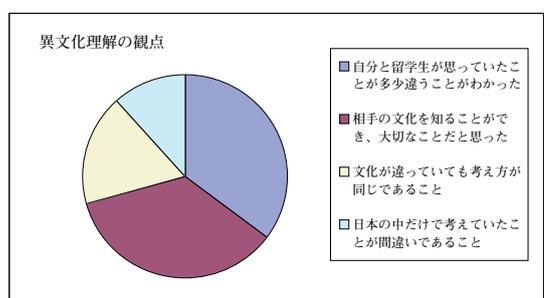


図2 異文化理解に関するデータ

### (3) コミュニケーションの観点 (図3)

ワークショップ形式の授業なので、自由なコミュニケーションによる学習が達成された。

学生間、教員間の共同学習により交流が活性化し、双方で教え・教えられる多面的なコミュニケーションの関係が観察された。

常に相手を意識した言語コミュニケーション学習が実現できたことに対する満足感が観察された。

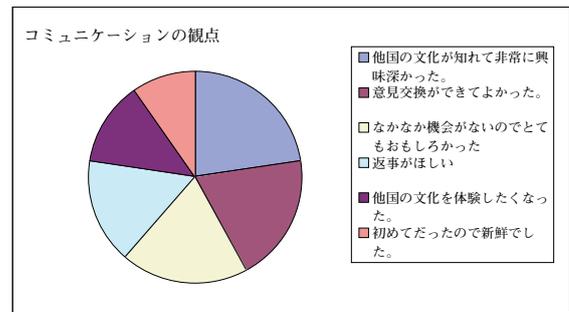


図3 コミュニケーションに関するデータ

### (4) テクノロジ活用の観点

時間・空間を超えた遠隔交流であるため、Webに積極的な投稿が多くあった。

多人数参加による電子掲示板は、対面学習では不足しがちな推敲が観察され、他の投稿内容を批判的に観察・推敲を深める効果があった。

ネット上の学習資源検索、ワープロでの和文・英文の作成、辞書エンジンの活用など、積極的な自律学習の優位性がみられた。

## 5. 問題点・課題

教科書のデジタル化とテクノロジーの活用、社会実践に根ざした言語コミュニケーション能力の養成、学生を主体とした教育方法をキーワードとして実践した新しい英語授業システムであったが、以下のような運営上の問題点もあった。

教材はすべて授業に根ざした自主教材であるため、汎用性を持たせる共通教材の作成に時間と努力が必要である。

他大学との授業間交流のため、教員は週単位での交流活性化に関する調整が必要である。

グループ交流では交流相手が特定されることから、交流に積極的な学生や消極的な学生、欠席やドロップアウトなど返事がもらえない、反応がないというクレームが発生し、学習の動機付けに影響を与える。

## 5. IT活用に伴う課題

国際社会に活躍する人材等に求められる英語力とは、知的な社会力であり実践能力でなければならない。大学の英語教育は単に中等教育の延長にあるのではなく、その社会目的を包括的に捉えながら、国際社会・実社会に受け入れられるよう、授業設計・授業方法・授業評価を開発していかなければならない。その開発に関しては以下のような課題がある。

IT活用を見据えた教員の英語授業設計力と授業実践力の向上

言語と情報を目的に合わせて選び使うことができる学生の自律性と学習力の向上

指導と評価、学習力と評価、外部社会への説明責任を三位一体とする評価体系とWEB上で利用可能な全国統一的な共通英語能力の評価基準の策定

汎用性があり、相互利用が可能な授業実践モデルやデジタルコンテンツの公開と配布、著作権上の処理